校長室だより～燦燦～ №４２０

疎開

2021.9.7

毎年、次から次へと様々な災害が我々の身に降りかかってくる。「天災は忘れたころにやってくる」という言葉は、もはや死語である。天災は忘れる間もなくやってくる。

今後予測される災害に備えて、具体的にどのような防災をするべきなのか。あるいは、減災という観点から考えるべきなのか。今までは、自分が住んでいる福島のことを中心に考えてきた。日本の首都である東京が、大地震により機能マヒに陥ったらと言っても、自分事として考えることは難しかった。

だが、様相が変わってきた。学生である娘が、首都圏にいる。加えて、息子が就職をし、東京に住むことになったら、俄然状況が違ってくる。東京や首都圏の問題は我が家の問題となるのである。

いざという時のために、何をしておけばいいのか。これが、現実かつ喫緊の課題となってきた。一つは、「近い疎開」と「遠い疎開」を事前に決めておくことであろう。大雨や台風の場合、一晩過ぎれば通り過ぎるため、あえて遠くまで避難する必要はない。避難指示が出たら、お世話になれるような友人を日頃から探しておく必要がある。

これに対して、地震や津波で住んでいる地域が壊滅状態になるなど、長期にわたって機能不全に陥った場合、その地域から離れた安全な地盤の疎開先を見つけておくことが「遠い疎開」である。東京の場合であれば、北と西で各１か所ずつ疎開できる場所を探しておくべきである。

もう１０年前のことになる。東日本大震災の際、福島の放射線が問題になったときである。新潟の知人から突然連絡がきた。その知人は、イタリアのローマ日本人学校時代の同僚であった。帰国してからは連絡を取っていなかった。それが、人伝えに私の連絡先を調べてくれたそうである。

近くに町の住宅が空いているから、避難してこないかというのである。ありがたかった。その気持ちだけで十分であった。夫婦ともども教員をやっている我が家は、避難するわけにはいかなかった。子どもだけでもという選択肢もあったかもしれない。しかし、緊急の時ほど、苦しい時ほど、家族は一緒にいた方がよいと考えた。

イタリアの知人からも連絡がきた。イタリアに来ないかというのである。福島や日本よりも安全なことは間違いない。だが、イタリアに行くということは、仕事をやめることを意味する。これも気持ちだけいただいて断念した。

新潟の知人にもイタリアの知人にも、今でも感謝の気持ちを抱いている。年賀状とエアメールを送ることぐらいしかやっていないが、この気持ちはずっと忘れることはないだろう。

「疎開」は、戦時中のことだとずっと思ってきた。ところが、現代でも平和な日本でも疎開はあり得るのである。果たして、うちの息子には、西の友人はいるのだろうか。不安である。